

受領No. 1624

持続可能な地域拠点の実現に向けた在郷町における近代以降の公共的空間の変容過程の解明

代表研究者 柴田 純花（東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程）

Transformation Process of Public Space in Traditional Country Town since the Modern Era

Representative Ayaka Shibata (Ph.D. Student, The University of Tokyo)



研究概要

本研究の目的は、地方都市の持続可能な地域拠点の実現に向け、在郷町における近代以降の公共的空間（公有民有を問わない一般に開放される施設及び空地）の変容過程を解明することである。在郷町とは、近世以前に農山村地帯の流通結節点として成立した歴史的集落のことを指し、現在も地方都市の農山村地帯に存在し続ける町が存在する。こうした地域での将来の地域拠点形成の重要性は社会的に認識されているが、具体的な空間計画や空間像が提示されているとは言えない。

本研究の第1部では、北陸地方の在郷町を事例研究の対象地とする。図面史料を用いて町の成立経緯や集落形態に関する基礎的な調査を行い、集落形態類型ごとに明治期以降の公共的空間の変容過程を分析して、共通点と相違点を明らかにする。第2部では、全国の在郷町に近年整備された公共的空間の事例を調査し、その整備経緯を明らかにすることによって歴史的空間の保全、再生と両立する地域拠点の空間像の手がかりを得る。

本研究によって、都市計画史・形成史研究の分野において研究が乏しい在郷町の都市形成史に関する知見を蓄積する。また、単に施設を集積させるだけではなく、地域の歴史と文化を尊重した地域拠点の形成を計画、設計するための基礎的な知見を得ることを目指す。